スクランブル・アーカイブ●ランチア NEKO MOOK 3199

car MAGAZINE 特別編集

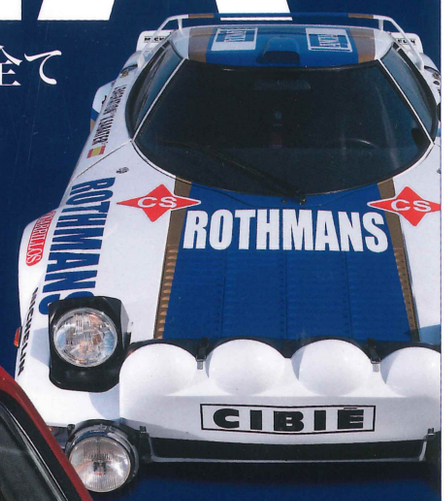
動き始めたランチアの未来

SCRAMBLE ARCHIVE

LANCIA

先進と成熟のイタリアンブランド、ランチアの全て

DELTA NOW 日本初上陸車から筑波1分切り16Vまで、デルタ新時代
LEGEND LANCIA ストラトスという永遠のマスターピース
CLASSIC & YOUNG TIMER 記憶に残るランチアの名車たち
HISTORY 創業者が生まれた聖地、イタリア・フォベッロを訪ねて
LIFE WITH LANCIA ランチアと共に生きる人々



WE LOVE LANCIA, FOREVER!

DELTA NOW WORKS REPLICA

LIKE A CORSICA RALLY

気分はオリオール。これぞ究極のデルタ遊び

霧の峠を迫ってくる1台のマルティニ・レーシング・カラーのデルタ。ここはコルシカ島……ではなく、静岡県某所。実は世界各国のラリーを転戦してきた山本佳吾カメラマンに、海外ラリーをイメージして撮影してもらったものだ。ビアルベーロの鳥羽昭伸代表に、このレプリカマシン製作の意図などを訊いた。

text:Hidenori TAKAKUWA(高桑秀典) *photos:Keigo YAMAMOTO*(山本佳吾)
取材協力:ビアルベーロ(phone:054-205-0800)

いまなお数多くのファンを獲得しているランチア・デルタHFインテグラーレは、ランチアのラリーヒストリーを語る際に忘れてはならないレジェンドマシンだ。

なかでもマルティニ・レーシング・カラーのデルタHFインテグラーレは常勝を誇ったこともあり、ランチアのラリーマシンといえば紺、水色、赤によるマルティニ・ストライプというイメージが圧倒的に強い。

静岡市葵区にあるイタリア車専門店のビアルベーロが製作したレプリカ・デルタも、精悍なマルティニ・レーシング・カラーを纏っている。同店の鳥羽昭伸代表に伺ってみたところ「2019年にお客様からのオーダーでセミワークス車両のレプリカを製作したことがあり、当時のプライベーターが乗っていたクルマもいろいろ調べました。しかし、結局、定番のマルティニ・レーシング・カラーであれば、誰もが納得するので、今回はそれを選びました」とのこと。

しかし、細部に至るまで徹底的に仕上げられたビアルベーロのレプリカ・デルタは、エクステリアだけをマルティニ・レーシング・カラーにしたマシンではない。インテリアもレーシーな雰囲気で造り込まれているのだ。鳥羽代表に製作の経緯も伺った。

「2019年に行われたセントラル・ラリーに037ラリーのサポートスタッフとして参加した時に、大会関係者から2020年はここでWRCとセントラル・ラリーが併催され、今回はそのテストのための大会であると聞きました。WRC参戦マシンが日本で走るコースを自分も走ってみたい、参加してみたいと思ったことが始まりだったんです。2020年、2021年はセントラル・ラリーは開催されましたが、残念ながらコロナ禍でWRCはキャンセルとなりました。出場資格のハードルもありましたが、参加可能な車両がないことには何も始まらないと思ったので、2021年2月6日から車両製作に入りました」

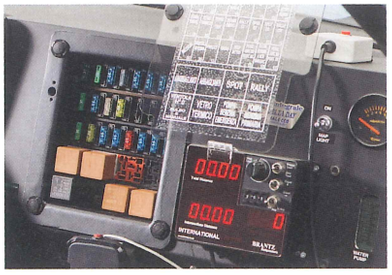
車両製作過程を伺ったら、やはり、大変なことになっていた。まず、ベース車両となった実動デルタ(1993年式のエボルツィオーネI)のボディカラーがレッドだったので、それをホワイトにオールペイント。マルティニ・ストライプまで塗装で再現したので、ペイントする段階だけで、トータルで1年以上という月日がかかっている。

カラーリングに関しては、当初、何にしようか……と思っていたらしいが、セントラル・ラリーに出場することが決まった際に横に並ぶであろう037ラリーとのツーショットをイメージし、マルティニ・レーシング・カラーにしたという理由もあるそうだ。

題材となったのは、地中海に浮かぶフランスのコルシカ島で1992年に開催されたツール・ド・コルスにて優勝した、ディディエ・オリオールがドライブした車両である。

内装は自社でパーツを取り払い、可能な限りホワイトボディに近い状態にして、フロアを

MARTINI RACING
MICHELIN
MICHELIN
CORELLO
CORELLO
car
MAGAZINE
MARTINI RACING
3
D. AURIOL
B. OCCELLI



1992年のツール・ド・コルスで優勝した車両のレプリカとして、内外装とも造り込まれている。エンジンは、オーバーホールした際に各部のフルバランス取りやWPC処理を実施。コレクタータンクを設置し、ガソリンを安定供給しており、ARC Brazingで造ってもらったオイルクーラーとパワステ用オイルクーラーを装備。ラジエターはオールアルミ製で幅が厚いタイプに変更している。リアエンドのボードはイタリアから取り寄せた燃料隔壁だ。

シルバーにペイント。そこから各部品を組んでいった。ルーフに穴を開け、イタリアから取り寄せたパーツを組み込むことで、ちゃんとベンチレーションできるようにしている。ロールケージは当時のスパルコ製FIAモデルで、リアドアのガラス部分は軽量なアクリル製に変更。スペアタイヤの横にバッテリーケースを配置している。ホワイトボディ状態からパーツを組んでいったので、ヒューズを移動し、助手席の前に集約することまで可能になったのであった。

「デルタをサーキット用のレースカーにモディファイした経験はたくさんありますが、ラリーカーにしたことは少ないです。以前はデルタの8割がモディファイ車両でしたが、ここ最近はオリジナルに戻す方が増えています。でも今回は敢えてマルティニ・レーシング・カラーのレプリカを製作してみました」とは鳥羽代表のコメントで、さらに興味深いことを教えてくれた。

「いよいよデルタも年式的にクラシックカーとして捉えられるようになったので、海外でも旧車のイベントに参戦でき、再び盛り上がっています。その恩恵で、当時のワークスラリーカーが装着していたパーツのレプリカが流通しているので、以前よりもデルタのラリーレプリカを製作しやすくなりました」

鳥羽代表からそのようなエピソードを伺っていたら、筆者も1台造りたくなってしまった(もはや流通価格が高価すぎて、ベース車両すら買えないが……)。自分だったら、あの時のカラーリングにして、ドライバーの名はミキ・ビアシオンかな、などと、いろいろ夢想していたら、これもデルタ遊びのひとつだな、と思えてきた。

そう考えると、このようなラリーレプリカ製作は"究極のデルタ遊び"だといえるので、我こそは! と思った猛者はビアルベーロに相談してみるといいだろう。

ラリー・ジャパンの併催イベントに出場

2022年11月10日〜13日までの日程で開催されたラリー・ジャパン2022はセントラル・ラリー2022と併催され、その中でクラシックカーによるアルペン・クラシックカーラリー2022が実施された。2023年からラリー・ジャパン・クラシックに名称が変わり、モナコ・ヒストリックと同格に昇格するとの情報も入ってきている。今後に期待したい。

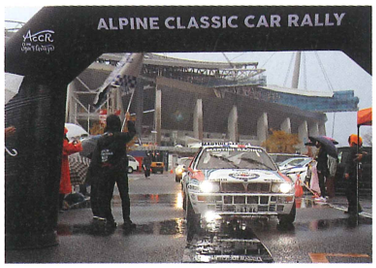
DELTA NOW **WORKS REPLICA**

LIKE A CORSICA RALLY

題材となったのは1992年ツール・ド・コルスで優勝した車両。

ビアルベーロはランチア中心のイタリア車専門店です!

おかげさまでビアルベーロはもうすぐ30周年を迎えます。
これからも楽しい方向に舵をむけて。

BIALBERO

〒420-0876 静岡県静岡市葵区平和3丁目4-10 www.bialbero.jp